

# 今から七千年前の貝

山本 素未 秀

近年、地球の温暖化がさかんに言われているが、実は地球の温暖化が進んで南極と北極の氷河が溶け、海面が上昇しはじめたのは、私が増林地域で縄文時代前期の土器を発見したことからしても、今からおよそ七千年前のことであると思われる。「縄文海進」と呼ぶ。東は下総台地、西は大宮台地、南西は武蔵野台地に囲まれた中川流域は、周囲の洪積台地に比べると低く、海進による水位も現在の海面より五メートル前後高くなっている。現在の元荒川流域や利根川流域は、海底に没して海となっていた。これを「奥東京湾」と呼ぶ。

やがて気候は寒冷化へと進み、一転して海退が始まり、やがて諸河川の流送土砂の埋積、地盤隆起、海退などによって陸化されていった。その頃、海進で住んでいた貝が、やがて海退が始まるにつれ取り残された。それを私が拾い集めたのである。

縄文時代の海進海退については、海面上昇の速度やその最高位について、いまだに統一見解されていないのが現状である。しかし、貝塚の産出によって判断されうる貝塚の分布状況、貝塚の産出の差などが手掛かりとされ、縄文早期末から海進が認められる。現、海岸線から内陸深く入った地点に多くの貝塚が残されている。

杉戸町付近の沼貝塚では、ハマグリ、バイガイ、サルボウ、マガキ、オキシジミなどすべて鹹水産貝類が出土した。旧庄和町神明貝類でもヤマトシジミを主とした淡水産の貝と共にウミナ、サルボウ、バイガイ、カキハマグリ、アサリなど浜辺で採れる海水産の貝が混在している。

海進が終わりを告げ、そして一転して海退が始まり、奥深く湾入していた海岸線は次第に後退を始めることとなる。

当増林地域でも、同じような現象であったと思われる。私の貝採集地点は、新方川に架かる鷹城橋と城の上橋との中間東側で、地元では、通称、「土手岸」と呼んでいる場所である。土地番号は一丁目二十と二十一の隣で、平成九年二月から三月いっぱいには排水路の工事が行われた地点である。札幌市中央の五大建設により施工された。排水路は、コンクリートで板塀を取り除いてU字坑に取り換える工事で、排水路を削って一五〇センチ掘り下げ、土台にコンクリートを埋設した上にU字坑を設置するのである。この際に四〇から五〇センチ掘り下げた側面砂地の層に貝が点存していた。採集は、平成九年二月六日から三月二十三日までである。集めた貝は、細かく割れやすく、原形のまま残すのが難しい。原形を保っている貝を写真で詳解したいと思う。

※参考文献 「新編埼玉県史図録」（埼玉県、平成五年三月二十五日刊）

「縄文文化の研究」（雄山閣出版）

## 増林で発見された遺物（土器・貝）のまとめ

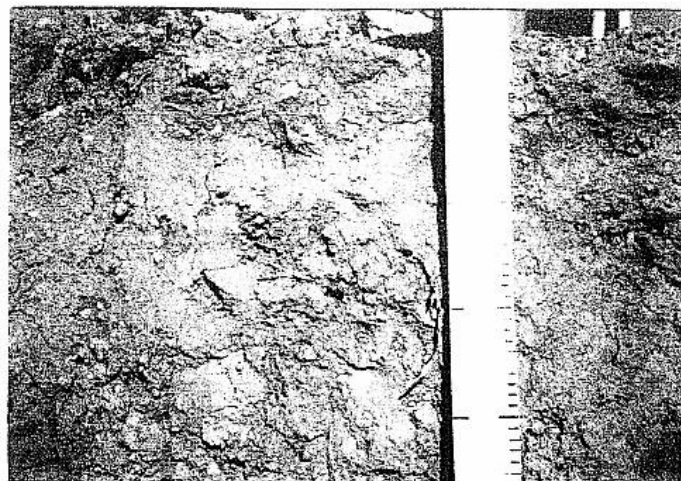
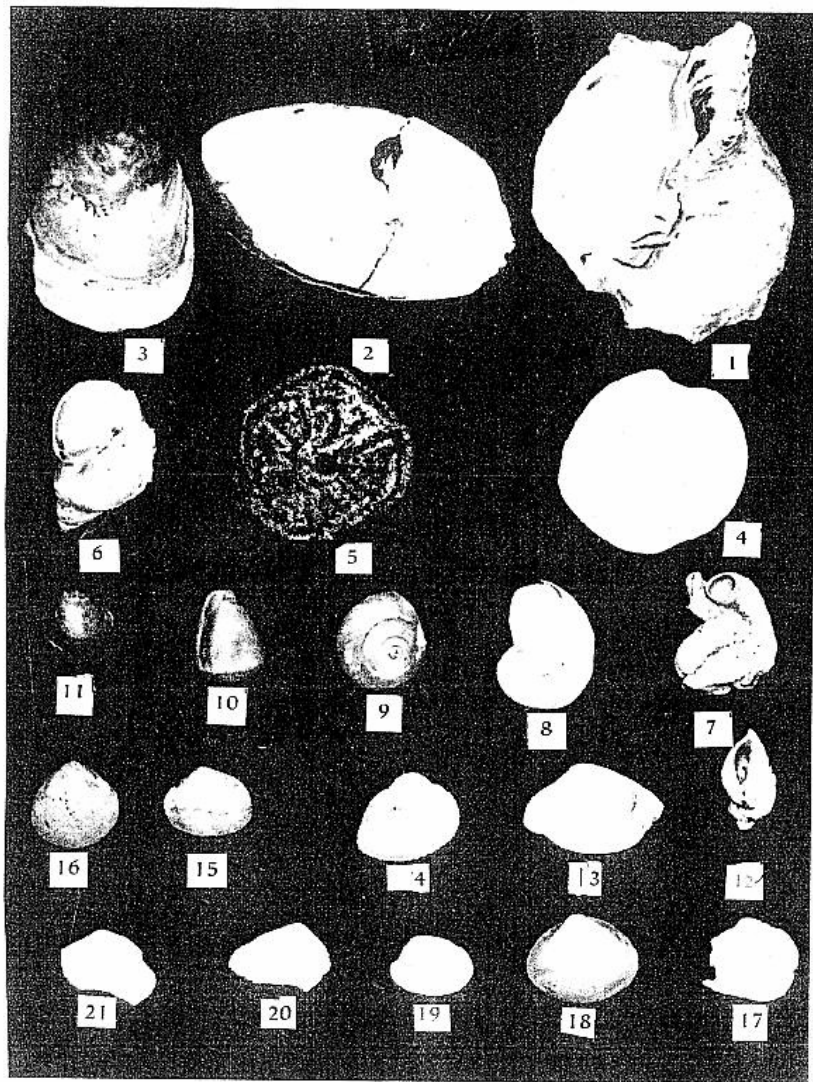
地域 時代	① 増林下前	② 増林下前	③ 中妻前	④ 山 中	⑤ 土手岸
縄文早期 七千年前					○
縄文前期 六千～五千	○				
縄文中期 五千～四千	○	○			
縄文後期 四千～三千		○			
縄文晩期 三千～二千三百					
弥生前期 BC300～AD1年					
弥生後期 1世紀～3世紀			○		
古墳前期 4世紀		○	○		
古墳中期 5世紀					
古墳後期 6世紀		○			
飛鳥時代 7世紀				○	
奈良時代 8世紀					
平安時代 9世紀以後	○	○		○	
中世 13世紀	○	○		○	

- ①草加・八潮両市の合同調査で発見した土器片  
(昭和56年)
- ②増林下前・私が再調査で発見した土器片  
(平成6年8月3日～平成9年8月10日)
- ③前回、私が発見・発表した土器片  
(平成8年1月13日～平成10年5月2日)
- ④前回、私が発見・発表した土器片  
(平成7年3月13日～3月23日)
- ⑤今回、私が発見・発表した縄文早期の貝  
(平成9年2月6日～3月23日)

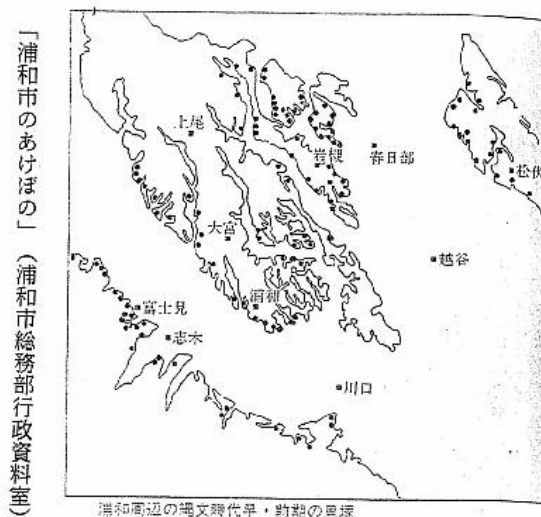
※若干埋まらない時代もあるが、大筋で縄文時代から今日に至る間、人々が住んでいた形跡が見えてくる。

増林の通称「土手岸」での排水路工事  
(平成9年2月～3月)





平成九年二月の「十三岸」での発掘状況



### 縄文海進・海退

地質学でいう沖積世(約1万2千年前から現在)に入り、約7,000年前になると地球の温暖化が進み、雨量の増加や地球上の氷(南極や北極)の一部が溶け、海は、現在の海面より5メートル前後程高かったと考えられている。

この時期は、考古学でいう縄文時代にあたり、海が内陸深く入り込んだことを「縄文海進」、また、逆に海が後退していくことを「海退」という。

- |           |           |           |
|-----------|-----------|-----------|
| 1 アカニシ    | 8 ヒメツメタ   | 15 アサリ    |
| 2 オオノ     | 9 キサゴ     | 16 モシオ    |
| 3 カキ      | 10 イモ     | 17 ハマガリ   |
| 4 カガミ     | 11 ナミマガシワ | 18 パカ     |
| 5 ハスノカンバン | 12 シテトリ   | 19 リュウザクラ |
| 6 パイ      | 13 ウチムラサキ | 20 モシオ    |
| 7 オオヘビ    | 14 サルボウ   | 21 ウバ     |

※鑑定には、茨城自然博物館学芸員の協力を得ました(平成19年12月23日)。